

想いの在り処

雨泉洋悠

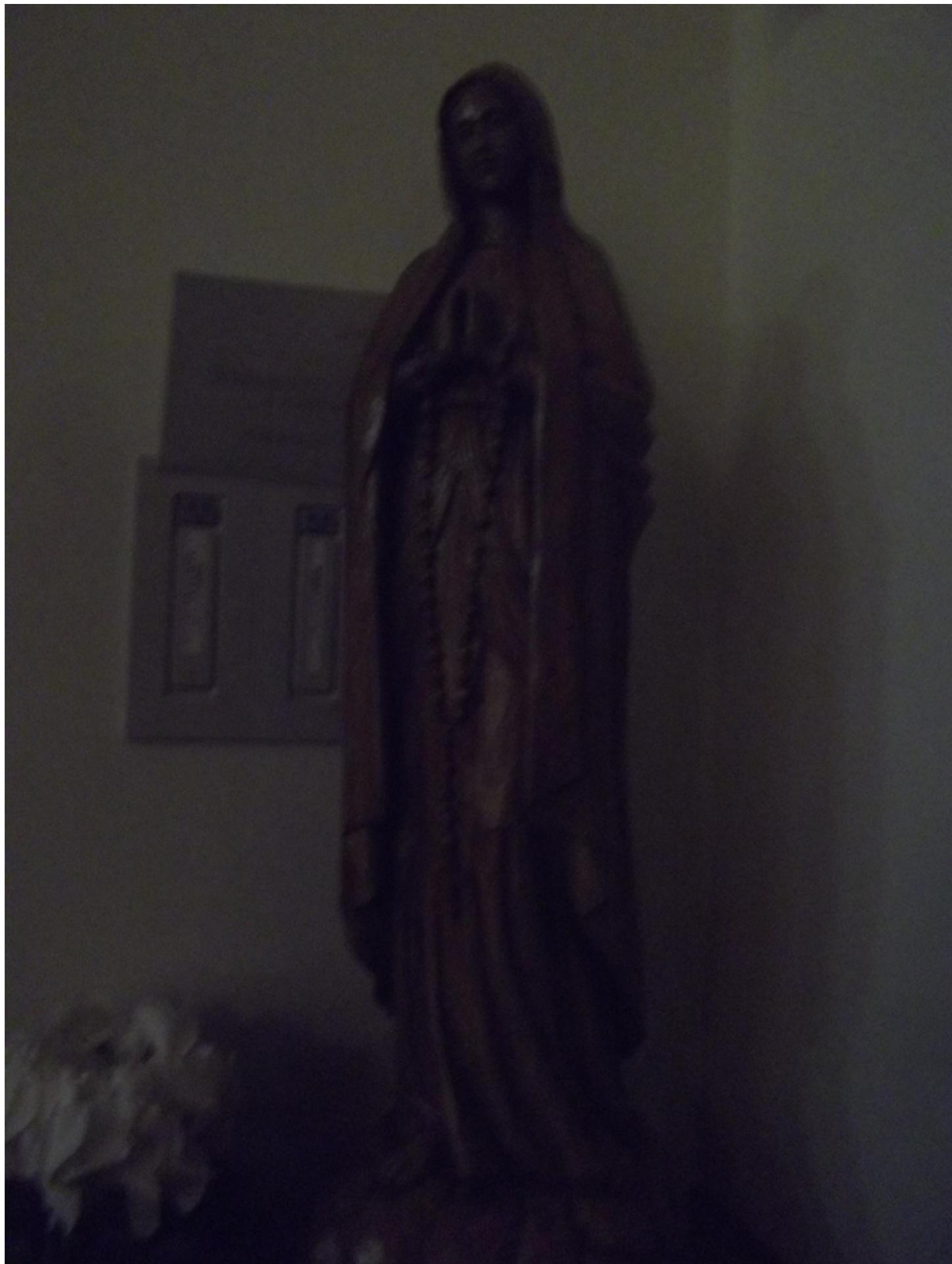












想いの在り処

想いの在り処

雨泉 洋悠

ああ、マリア様、叶うなら、私の想いを、ただあの場所に…。

喧騒に包まれたこの空間は、数時間後に訪れる、数瞬の奇跡のために、歓迎の準備を進めている。

その瞬間に立ち会う事を望まない私は、あえて、今この場所に来た。

この日のために飾り立てられた空間。訪れたものを導くための、風に踊る多くの灯火。

今日に限っては、はるか遠くに浮かぶ瞬きにも負けることのない、揺らめく信仰の証。

その向こう側、今宵の主役の降り立つ、祈りの空間。

私は、その空間と私を隔てる、簡素な木製の引き戸に手を掛ける。

それほど強く力を入れるまでもなく、音も無く引き戸は開かれて行く。

引き戸の動きに合わせて、光量を増す光の筋。

それを見る事で、明かりの灯されたこちらの空間と比べても、引き戸の向こう側の空間の方が、より明るい光に照らされていることが解る。

光の筋は、私の視線を跨ぎ、その全身を包み込む。

音も無く、光のみに満たされたその空間。そこに私は、足を踏み入れる。

そのまま、後ろ手にこの空間を隔絶する引き戸を閉じた。

そこにいたのは、光りに包まれた今夜の主役。静かに佇む、神の子。

私は、静かにその目前に進み出る。そして、この場所をお借りした理由と共に、その姿に想いを捧げた。

『ああ、イエス様。もし本当に、お祈りへの後付け設定が赦されるなら、あの日一度だけここに来た、あの日の私の祈りを使わせて下さい』

「先輩、私こういう所に今まで来たことがないので良く解らないんですけどどんな事お祈りすれば良いんでしょうか？」

私は隣で真面目に手を合わせている先輩に問い掛ける。我が家は典型的な日本の家族とも言える一家なため、こう言う場所には今まで全く縁がなく、今日初めてきた。

先輩は閉じていた眼をそっと開いて、こちらを向く。マフラーの上で、もさっとしているその

長めの髪がもさもさ揺れる。

「そうだなあ、私はいつも世界の平和とか自分の幸せとか、今日みたいな日はそれこそ素直におめでとうございますとか……」

人差し指を立てながら少しだけ上目遣いに目の前の十字の像に向き直りながら答える。マフラーの上で、もさもさと、また髪が揺れる。

先輩の中では、世界平和と自分の幸せと誕生日おめでとうは、一緒くたになってしまうようだ。

「何かお願いごととかはないの？」

また、もさもさ揺らしながら、こちらを見る。

「今のところ、それほど切実にお願いしたいことがないですね」

もさもさ髪ばかり見ながら話している訳にもいかないの、視線を先輩の視線に合わせてながら続ける。

「先輩の言葉を借りるならおめでとうございます、ぐらいしか言う事がないかな」

私はお手上げ、と言う感じのポーズで先輩に答える。今のところ、真面目な話、神頼みしなきゃいけないことがない。

「あはは、じゃあ何もお願いしないで取り敢えず保留にしておけば良いよ。今度お祈りに来た時にでも思いついたら今日の分もお願いすれば良いよ」

先輩は髪の毛をマフラーの上でまた、もさもさと揺らしながら笑った。

「えー、そんなマンガの後付け設定みたいな事を神様に対して何てやっちゃって良いんですかー？」

私はちょっと呆れ気味に突っ込んでみる。先輩はより一層もさもささせながら笑っていた。

「あはは、良いんだよー私の神様は結構融通が効くんだから」

先輩に、私の神様何て言われると、本当にそんな風に何でも融通が効いてしまうような気がする。

思い浮かぶのは、そんな些細な思い出。私の中で思い浮かぶ先輩は、いつもマフラーの上で髪をもさもささせながら笑っている。

私は、自分の中に湧き出た願いをその場所に残し、先ほど入ってきた引き戸を開けて、光の筋に背中を見送られながら、その空間を後にした。

門を出る前に、あの日を思い出して、私が先ほど後にした空間の横に立つ、白い像の方に向き直って、軽く会釈しておいた。

あの日も、門を出る時に、先輩だけが思い出したように駆けて行って、その像にお祈りを捧げていた。

門を出て、少し歩いた先にある、歩道橋。

あの日と同じように、私は歩道橋に足を掛けた。

歩道橋を上りきった所で、突風のように凍てついた風が駆け抜けた。

「先輩、寒いです……」

私は正直な感想を言葉に出した。本当にとっても寒い。というか、一気に風が強くなった気がする。

「いやあ、寒いよねえ本当に、ここまで来ると海が目の前だから海からの風が強く吹き付けるんだねきっと」

先輩が手袋でもこもこになった手に、息を吐きかけながらそう言う。

「あーそっか、海が近いから風強いんだ」

私も素手に息を吐きかけながら呟く。

「そうそう、海が近いから海の眺めもとても綺麗なんだけど、それよりもほら」

そう言って、私の手を取りもう一方の手で、上の方を指さす。もこもこした手が辛うじて指差す形になっている。

その指にそって、頭上に眼を向けると、この街で一度も見たこともないような、星々の輝きがそこにはあった。

その日もらった手袋で、同じ形で空を指さしながら、あの日見たのと同じ空を、同じ場所で見上げる。あの日と変わらない輝きがそこにはあり、あの日と同じ、全天に描かれた神話の光がそこにはある。

星々のスクリーンに投影される、数少ない思い出の日々。

私と先輩との思い出なんて、実を言うと、そんな去年の今日にあった出来事ぐらい。

入学直後、部活動紹介で一生懸命に星の話をしていた姿、その後廊下でちょっと強引に他の一年生を勧誘している姿、入部した後初めての自己紹介の時の姿、初めての観測会で熱心に新入部員に説明してくれている姿、夏の合宿で楽しそうに星や星座について解説している姿、部活の後の帰り際の挨拶、部長と今後の活動について話している姿、お別れ会で初めて見た先輩の涙、その時私が流した涙の意味。

そんな、大切な思い出にすら至らないような、他愛もない思い出のかけら達。

僅かな甘さと、棘のように残るほろ苦さを残して、送られていった映し出される日々。

そして、最後に投影されるのは別れの日。

卒業式、先輩は今日この学校からいなくなってしまう。私は一年生だから、卒業式に出席する義務はない。希望者だけは出席可能だから、私は誰にも言わずに一人だけこっそりと出席した。

先輩の名前が呼ばれる時、私も釣られて緊張した。先輩の凜とした声と、横顔が記憶に残っている。

式の後、友達の卒業生達に囲まれている先輩の姿をちらっと見て、結局その中に入って行く事はできなかった。

そこで姿を見せることが出来るだけのものを、私は先輩と積み重ねていなかった。

過ぎていく日々の中で、十二月のあの日の出来事だけ胸の中において、ただ流れるままに日々を過ごすしか出来ていなかった。

それでも、私は帰り難くて、いまこうして部室の中で、先輩の席の真横の、窓際に腰掛けて、先輩の良く座っていた、席を眺めている。

夕暮れ時のオレンジ色の光が、あの日貰った思い出と、この部屋に先輩の残した思い出を照らしている。

少しずつ、私の視界が滴に滲んでいく。少しの喜びと大きな後悔を伴って、今更になって私の心を揺り動かす。

あの日自分が流した涙の意味なんて、解っていたはずだった。

先輩と過ごした日々、先輩との思い出、私は本当はもっと先輩ときっと……。

私の嗚咽は、誰も居ないのを良い事に、今まで気づけなかった分、気づかないふりをしていた分、日々に流されていた分、長い時間溜め込んでいたものを全て吐き出すように、堰を切って大きくなっていった。

「誰かいるの？」

自分のせいで、部室のドアが開けられたことに全然気づけなかった。咄嗟に顔を見られないように隠した。

「す、すいません。大丈夫です、直ぐ帰ります」

焦っていたのか、私はその声が誰であるかということに全く心が向かっていなかったのだ。その人は、私の近くまで歩いてきて言った。

「大丈夫じゃないね、私だよ」

私はやっとその声の主に思い当たる。涙とか全部そのままに、私は驚いてその人の方を見た。

「先輩……」

夢か幻か、このオレンジ色に包まれた空間で、たった今やっと想いを巡らせることが出来た相手が現れた。

「どうしたの？あ、もしかして好きだった先輩が卒業しちゃってもうの哀しくなっちゃったとか？」

あの日と同じマフラーの上で、あの日と同じく髪の毛をもさもささせながら、あの日とは違う手袋で手をもこもこさせながら先輩は言う。

「え、ええとあのその」

いざ先輩本人が目の前に現れてしまうと、何を口に出したらいいものやら良く解らず、意味不明の事を繰り返してしまう。

「いいよいいよ、無理に誰とか何とか言わなくて。何だかなあ、あまり話せなかったから誰のこととか予想もつかないから」

苦笑いを漏らしながら、手袋で私の涙を拭いちゃう先輩、ほんの少ししか一緒に時間を過ごせなかった後輩にも優しい先輩。

違うんです先輩、私は先輩ともっと仲良くなりたかった、一緒に時間をもっとちゃんと過ごしたかったんです。

言葉にならない思いばかりが心に溢れて、滴となって外に出て、先輩のもこもこの手袋に吸われて消えていく。

何で私たちは、こんな大切な瞬間でまで想いの在り処に彷徨ってしまうのでしょうか。

「ごめんね、ずっと誰にも言えなかったことなんだけど私、今日この後直ぐにこの街を離れなきゃいけないの。だから貴女の痛みが癒えるまで、ただ傍にいてあげて、慰めてあげている時間がないの」

先輩はそんなとんでもない重大発表を一方的にしつつ、私にとっては先輩の一部になっていたマフラーを外して私にふわりと被せてくれる。

もさもさとしていた先輩の長い髪が、マフラーを外されてふわふわとオレンジ色の中に跳ねた。

私にマフラーをくるくると巻きつけた後、先輩は少しだけ寂しそうにして、マフラーにおでこを載せるようにして俯いた。

「もし、気が向いたら、本当に万が一その気になったらでいいんだけど。もう一度あの日に……主役の……で」

最後の方は掠れた声で聞き取れなくなっていった。

私が、必死に絞り出した言葉を、先輩に返そうとした瞬間。

先輩は俯いたまま、部室を飛び出してしまった。最後に今日にふさわしい一言、

「さようなら」

とだけ、言い残して。

先輩の残したマフラーに顔を埋めてみた。何故か、まだ涙を拭いてもいないのに、滴に濡れた感触がしたような気がした。

歩道橋の下を通る車の、走り去る音に揺り起こされる。

先程まで、全天のスクリーンに映されていたと思っていた映像は、記憶の彼方に再び押し戻された。

あの日聞き取れた言葉を繋ぐことで、今日まで希望を紡ぐことが出来た。

この場所で逢えないなら、最後の言葉がまだ有効と言うことだ。もしかしたら、いやきっと永遠に。

私は再びスクリーンを見上げる。一筋、光が流れた気がした。

「星ってさ、実を言うと今日の主役の一人なんだよ」

先輩は空を指さしながら言う。

「あれ？今日の主役ってイエス様じゃ無いんですか？」

私も釣られて見上げたまま、日本人の大半が持っているであろう、申し訳程度の今日という日に関する知識を披露する。

「そうなんだけどね、イエス様が生まれた時には、星が流れてマリア様のお腹に宿ったんだって。だから、星もマリア様も今日の主役なんだよ」

もさもささせながら先輩が言う。

「そっか、だから先輩はマリア様にもお祈りをしたんですね」

私はさっきの光景を思い浮かべながら言葉を返す。私の、日本人標準の申し訳程度の知識でもマリア様ぐらい解るし、イエス様のお母さんであることも知っている。

「そうそう、私実はマリア様の方が今日の主役だと思っているんだー。だって、イエス様の主役の日はもう一つあるし、お母さんが頑張らなかったら赤ちゃんは元気に生まれてこれないんだよ。今日はマリア様が一生の中で一番頑張った日なんだよ。まあ、もう一つマリア様が頑張った日があるんだけど今日その日の話をご法度だね」

もさもさ、もこもこさせながら、先輩は楽しそうに笑った。

私は、再び目を覚ます。一つ前の、今日と同じ日の思い出に残されたヒント。

最後の一つに縋るように、歩道橋を駆け下りて、あの場所へと駆け出した。

マリア様へのお祈りの後、その前に座り込む。

お聖堂で、ミサはもう始まったみたい。今のところ、ここに座っていても怒られない。ここから離れたりしたら、何だか心折れそうだし。このままマリア様のそばにいさせてもらうことにする。

振り返れば、後悔ばかり、何で私はもうちょっと勇気を出せなかったのか。

ずっと同じ部活だったのに、大した思い出も作れず、最後に格好つけようとして、格好わるいところ見せちゃうし。

どうして人間は、思うがままに生きることすらままならないのでしょうかマリア様。

一度だけ、たまたま駅で会ってここに連れてきた。私は私と一緒にいるのを楽しいと思ってもらいたくて、変に気合入れてて空回りしてしまっていたような気がする。

私の心の拠り所、想いの在り処なんてほとんどそこだけだ。

後はもう、せっかくお別れ会で泣いてくれてたのに副部長だからなんて格好つけちゃって特別扱いも出来ず、卒業式の後未練がましく部室に戻ったら運良く会えたのに何か泣いちゃってて、無理に格好つけようとしてダメダメで。

「はあ――――」

手袋仕立てに息を吐きかけるついでに長い溜息をつく。

何であの時に思いきって言えなかったかな私は。

もっと仲良くなりたかった、一緒の時間をもっとちゃんと過ごしたかった。

それと、一年の間の更に、少しずつの思い出だけしか無いけど、でもそれが私にとっては大切な宝物だよと。

ただその事を伝えたかったのに。

時間も場所もはっきり伝えていないし、今日と言う日と、この空間だけが頼りのささやかな約束。

その程度のことしか出来なかった。マリア様とその後ろに舞うたくさんの光を見ながら私は思う。

ああ、マリア様。もう一度言います、なぜ私達はただ思うがままに生きることすらままならないのでしょうか。振り返れば後悔だらけの毎日、ほんの少しの大切な幸せと、それを遥かに上回る多くのほろ苦い映像ばかりが心を占めて、それでもなおその思いに縛られて生きなくてはならないのでしょうか。

それでも、この思いが無い私なんてきっと私じゃない。こうしてあの子の事をここで待ち続ける私は、あの日からずっと繋がっている、あの日々を失敗しても、それでもずっとここまで歩いてきた大切な私と大切な想い。

大切なあの子。

「先輩っ！」

その懐かしい声に呼びかけられ、私は声のする方に視線を下ろしていく。

その子は、もう私の目の前まで来ていた。

「どうして……」

そんな、無為な言葉が口をついて出る。

「先輩が、マフラーを置いて行ってくれたから。あの日、大切な思い出と約束を残して行ってくれたから」

その子は、私があげたマフラーを、私があげた手袋で指し示しながらそう答える。

もう、彼女の懐かしい顔は涙で滲んでまともに見えない。

私は立ち上がり、彼女と目線を合わせる。

「先輩って、本当は泣き虫だったんですね」

そう言って、彼女はかつて私がそうしたように私の涙を拭ってくれる。

私はもう、堪らなくなって、ただただ泣いた。あの日、彼女の前で流すことが出来なかった分まで、流すかのように泣いた。

「メリークリスマス、先輩」

いつの日か、思い出の苦味を、甘酸っぱさを、叶わなかった思い、やり残した思いを、胸いっぱい思い出す時が来る。

いつの日か、きっとたどり着ける、想いの在り処。

終

BGM

SCREEN OF LIFE -Single Mix- / TM NETWORK

Still Love Her (失われた風景) / TM NETWORK

TWINKLE NIGHT (あるひとりのロマンチストの生涯) / TM NETWORK

FOOL ON THE PLANET / TM NETWORK

想いの在り処

<http://p.booklog.jp/book/64640>

著者：雨泉洋悠

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dairain/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64640>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64640>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ